

記憶をつなぎ、恩を受け継ぎ、次に伝える

温かな秋晴れの下、南三陸町、大川小学校に防災学習に無事行ってきました。

初めに南三陸ベイアリーナで語り部さんからお話をいただきました。佐藤さんは当時高校2年生、志津川少年自然の家で震災に遭いました。これまでも防災訓練はやっていたものの、自分たちが避難所設営をする経験は初めて。試行錯誤で運営している中で、命の「ともしび」が消えてしまいそうな方の対応まで任せられ、まさに命がけで人助けをした経験を語っていただきました。震災から10年、今後は町を復興から繁栄へと転換させる時代。今後未来を作ること、大事だと思うことを形作るということを大切に生きていきたいという言葉が印象的でした。

昼食後は南三陸町の語り部サークルの方々と一緒に南三陸町内を回り、当時の出来事をお話いただきました。特に代表の 様からは南三陸防災庁舎で津波到達まで避難放送を行っていた遠藤未希さんの話を中心に語っていただきました。鴻巣様も、自身の体験の他に、他の地域での震災の話聞いて回り、実際に何が起こっていたのか、自分はどうすべきだったのか、後生に何を伝えるべきなのかを自問自答しながら10年を過ごしてきたようです。最後に、「『防災』というが災害は防ぐことはできない。私たちは災害で『命を失う』ことを防がなくてはならないのだ。」と熱く語っていた言葉が胸に刺さりました。

大川小学校では、津波で破壊された校舎を目の当たりにし、改めて津波の恐ろしさを体感しました。もう子供たちの元気な声が響くことのない寂しげなたたずまいの校舎。それでも、未だに意味のある存在として生き残る「校舎」。もはや壊れた建物という存在を越え、何かを伝えるという使命を持ち、そこに立ち続ける孤高の建物。子供を守れなかった悲しみ、

その後悔を償うかのように立ち続ける校舎から、我々が心に刻んでおかなければならない大切な何かを教わってきたように思います。

宮城に住む者として、震災とどのように向き合い、どのように関わり、どのように伝えていくのか。その方法は様々です。今回見聞きしたことを個々人でしっかり受け止め、自分なりの方法で発信してほしいと思います。



▲大川小学校での献花



▲志津川の復興に尽力する さん



▲語り部サークル「潮風」代表 さん



▲震災遺構「南三陸防災庁舎」むき出しの鉄筋が無残にも曲がっている